

飯塚 信雄

〔研究課題〕 ドイツ・ロココ文学の研究

ーシャルル・ド・リーニュ『回想録』を中心にー

〔発表誌・発行所〕 明治大学教養論 225 号

〔表題〕 シャルル・ド・リーニュ『回想録』(1)

〔梗概〕 18世紀ドイツ文学及びドイツ文化の研究資料として重要な、シャルル・ド・リーニュ侯の『回想録』研究の成果は、明治大学教養論集第 225 号にその第 1 回分が発表された。(シャルル・ド・リーニュ回想録 1.) 今回は、ベルギーの大貴族であり、ウィーンの宮廷の将軍であると同時に、フランスの宮廷や文壇と親しい関係にあったこの文人の生涯をふりかえり、又、『回想録』成立の過程を追求した。シャルル・ド・リーニュ侯(1735～1814)は 7 年戦争から 1814 年のウィーン会議にいたるまでの激動の時代を、ウィーン宮廷の中核にいて体験したこの将軍はフリードリヒ大王、エカテリーナ女帝、ルソー、ヴォルテール、ゲーテ、ヴィーランド等と交友し、多くの著作と書簡集をあらわしているが、同時に、『プリンツ・オイゲン自伝』という偽作もある。しかし、その中でも、その『回想録』は彼自身の精神遍歴をあらわすと共に、時代を映す鏡として重要なものであろう。

だが、『回想録』のすべてを真実としてうけとるわけには行かない。オイゲン公子の自伝を勝手に創り上げたり、故意に歴史的事実を無視したりするその茶目っ気を諒解した上で、彼の精神的真実は追求されなければならないのである。

こうした前提のもとに、次年度は彼の『回想録』自体の内容を注意深く読みとることにしたい。